



公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会

吟剣詩舞

新型コロナウイルス 感染症対策 ガイドライン



Supported by

日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

は じ め に

2019年末に中華人民共和国にて発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、世界的な大流行(パンデミック)となり、多くの感染者や死者が発生しました。

吟剣詩舞界においても、2020年は従来実施されてきた全国大会やコンクール、講習会などが軒並み中止や延期となりました。そこで公益財団法人日本吟剣詩舞振興会(以下「財団」という)は、こうしたコロナ禍においても事業を継続していくための指針となるガイドラインの取りまとめを行うこととしました。

本ガイドラインは、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の「見解と提言」に基づき決定した「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」(令和2年3月28日策定(令和2年5月25日変更)、以下「基本的対処方針」という)及び内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室長が、各都道府県知事宛に令和2年5月25日付けで提示した事務連絡「移行期間における都道府県の対応について」(以下、「都道府県の対応」という)に基づき、現時点で実施もしくは考慮すべき、吟剣詩舞活動における新型コロナウイルス感

染症の拡大予防対策として実施すべき基本的事例を示すものです。

策定にあたっては「吟剣詩舞活動における飛沫飛散状況検証」(令和3年1月29日実施)を実施し、その検証結果及び専門家や実演家からの助言を受けました(検証結果につきましては詳しくは、16ページからの「日本伝統芸能 吟剣詩舞 舞台演目別 飛沫実証実験報告書」を参照ください)。

現在、新型コロナウイルス感染症の感染状況は、地域、年代、属性等によってさまざまであり、またこの感染症が、今後どのように変化し、社会生活にどのような影響を及ぼすのか、現時点においても不透明な状況にあります。

従って、本ガイドラインは、政府が発表している「基本的対処方針」や「都道府県の対応」、地方公共団体のロードマップ等の方針、日本国内の感染状況や科学的知見などに即した、現時点における吟剣詩舞活動実施の際の留意すべき事項を整理するものであります。これら政府や地方公共団体の方針や状況が変更された場合は、その都度状況に応じて対応することが求められます。

1

新型コロナウイルス感染症予防への基本対策

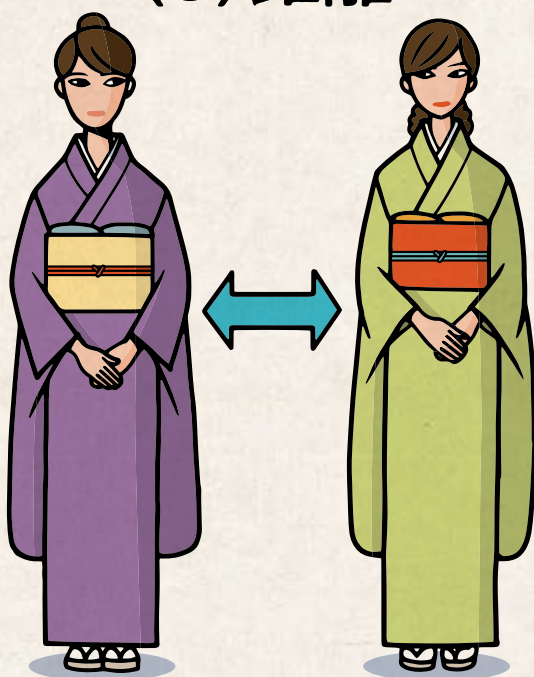
(1) 手洗い



(2) マスク



(3) 距離



(4) 換気



感染予防のためには、4つの基本行動すべての徹底が必要です。

(1) 手洗いや消毒の徹底

手指やモノ(舞台などで使用する道具など)の消毒を徹底しましょう。

①手指の洗浄(※)

会場や教室へ来た時は石鹼やハンドソープを使用し、洗うことが最も重要です。手や指に付着しているウイルスの数は、流水による15秒の手洗いだけで100分の1に、石鹼やハンドソープで10秒もみ洗いし、流水で15秒すすぐと1万分の1に減らすことができます。手洗いの後、さらに消毒液を使用する必要はありません。

②手指のアルコール消毒(※)

手洗いがすぐにできない状況では、アルコール消毒が有効です。アルコールは、ウイルスの「膜」を壊すことで無毒化するものです。会場施設の入口にアルコール消毒液(アルコール濃度70%以上95%以下の市販のエタノール溶液)を設置し、溶液を手によくすりこみます。利用者に対しては必ず消毒するよう推奨してください。

③モノの消毒(※)

施設設備(ドアノブやマイク本体、マイクスタンド等)は定期的に消毒してください。消毒方法として以下の4種類があります。

1. アルコール消毒液(濃度70%以上95%以下のエタノール)

濃度70%以上95%以下のエタノールを用いて拭き取ります。引火性があるので、空間噴霧は絶対にやめてください。

2. 塩素系漂白剤(次亜塩素酸ナトリウム水溶液)

テーブル、ドアノブなどには、市販の塩素系漂白剤の主成分である「次亜塩素酸ナトリウム」が有効です。市販の家庭用漂白剤を、次亜塩素酸ナトリウムの濃度が0.05%になるように薄めて拭きます。その後、水拭きしましょう。

3. 洗剤(界面活性剤)

市販の家庭用洗剤の主成分である「界面活性剤」も一部有効です。家具用洗剤の場合、製品記載の使用方法に従ってそのまま使用します。台所用洗剤の場合、薄めて使用します。

4. 次亜塩素酸水

「次亜塩素酸水」は、「次亜塩素酸」を主成分とする酸性の溶液です。消毒したいモノの汚れをあらかじめ落としおき、拭き掃除には、有効塩素濃度80ppm以上(ジクロロイソシアヌル酸ナトリウムを水に溶かした製品の場合100ppm以上)の次亜塩素酸水をたっぷり使い、消毒

したいものの表面をヒタヒタに濡らした後、20秒以上おいてきれいな布やペーパーで拭き取ってください。

(2) マスク等防護具の着用

飛沫の拡散や吸引、接触予防のため、マスク等の防護具の装着を徹底しましょう。

外出時や屋内いずれの場面でも、会話をする際、人との間隔が十分とれない時は、症状がなくてもマスクなどの防護具を装着しましょう。これには飛沫を防ぐとともに、むやみに自分の目や鼻、口に触るのを避ける目的があります。

マスク等防護具について

現在市販購入できる防護具として、「不織布マスク」や「布マスク」、「ウレタンマスク」や「フェイスシールド」「マウスシールド」などの多くの種類が流通しています。

「不織布マスク」

繊維あるいは糸などを織ったりせず、繊維を接着またはからみ合わせた薄いシート状の布のことを言います。複数の原料を組み合わせることで、厚みや空隙を自由に調整できるのが特徴。値段が安く、使い切りを前提にしています。

「布マスク」

布で作られた口と鼻を覆うマスク。不織布マスクや医療用マスクとは異なり、規格は定められていません。またウイルス感染や粒子状物質大気汚染に対する保護手段としての有効性において、あまり検証がなされておらず、指針もない状況です。一方、洗浄を行い繰り返し使用することができ、経済的です。

「ウレタンマスク」

ポリウレタン素材から成型された一体型マスク。顔に密着しやすく、ファッション性も兼ね備えていることから若い人を中心に流行しています。数回程度洗浄することができ、経済性にも優れています。通気性が良く、他のマスクに比べ楽に呼吸できるのも特徴のひとつですが、反面、不織布マスクに比べて飛沫、ウイルスなどを通しやすくなります。

「フェイスシールド」

個人防護具の一種で、飛び道具、瓦礫、化学飛沫、感染性物質などといった危険から、顔全体を守ることを目的としたものです。特に医療用途においては、血液や他の感染性の液体から医療従事者を保護するために使用されるものです。口鼻だけでなく目を防護する利点もありますが、小さな飛沫に対しては効果があまりありません。

「マウスシールド」

感染症予防などのために透明の樹脂などで口元を守る

個人防護具の一種。自分の飛沫が相手の顔などに直接付着しない等、多少の効果はあるものの、飛沫が飛ばないようにする効果そのものは極めて限定的であり、補助的な防御手段となります。

二重マスクにおける飛沫飛散効果の比較検証について

また効果をも高めるためにウレタンマスクと不織布を二重にするという例が多く見られるようになったことから、下表と同じ「富岳」を用いて2021年3月にも実験が行われました。

それによると、不織布マスク一枚の場合(装着の仕方別)と、ウレタンマスクと不織布を二重にした場合でどのくらい飛

沫の拡散を防げるのか、以下のような結果となりました。

「不織布マスク」一枚の場合

鼻の部分の金具を特に触らずに装着=69%

金具を鼻に合わせて曲げ密着させる=85%

金具を曲げるものの隙間がある=81%

「ウレタンマスク」と「不織布マスク」二重の場合

不織布マスクを隙間がある状態で装着し、外側にウレタンマスクをかぶせる=89%

この結果をうけて理化学研究所では「二重マスクにしても効果が大幅に高まるわけではないので、**不織布マスク一枚を隙間ができないようにつけることが大切**」と結論づけています。



不織布マスク
もっとも効果的に飛沫を防止できる



布マスク
感染防止の有効性はあまり検証されていない



ウレタンマスク
通気性に富むがウイルスも通しやすい



フェイスシールド
目も防護できるが小さな飛沫には効果小



マウスシールド
飛沫を飛ばなくする効果は極めて限定的

マスク等防護具における飛沫飛散効果の比較検証について

マスクの素材ごとのフィルター性能と通気性について、理化学研究所のスーパーコンピューター「富岳」によるシミュレーション結果が発表されています。これは「不織布マスク」「布マスク」「ウレタンマスク」「フェイスシールド」「マウスシールド」を用いて、それぞれ飛沫の吹き出し、吸い込みをどれくらい抑えられるのか計測したものです。

「不織布マスク」 の場合	「吹き出し飛沫量」20%	「吸い込み飛沫量」30%
	80%は抑制効果あり	70%は抑制効果あり
「布マスク」 の場合	「吹き出し飛沫量」34%	「吸い込み飛沫量」65%
	66%は抑制効果あり	35%は抑制効果あり
「ウレタンマスク」 の場合	「吹き出し飛沫量」50%	「吸い込み飛沫量」70%
	50%は抑制効果あり	30%は抑制効果あり
「フェイスシールド」 の場合	「吹き出し飛沫量」80%	「吸い込み飛沫量」
	20%の抑制効果のみ	小さな飛沫に対しては効果なし (エアロゾルは防げない)
「マウスシールド」 の場合	「吹き出し飛沫量」90%	「吸い込み飛沫量」
	10%の抑制効果のみ	小さな飛沫に対しては効果なし (エアロゾルは防げない)

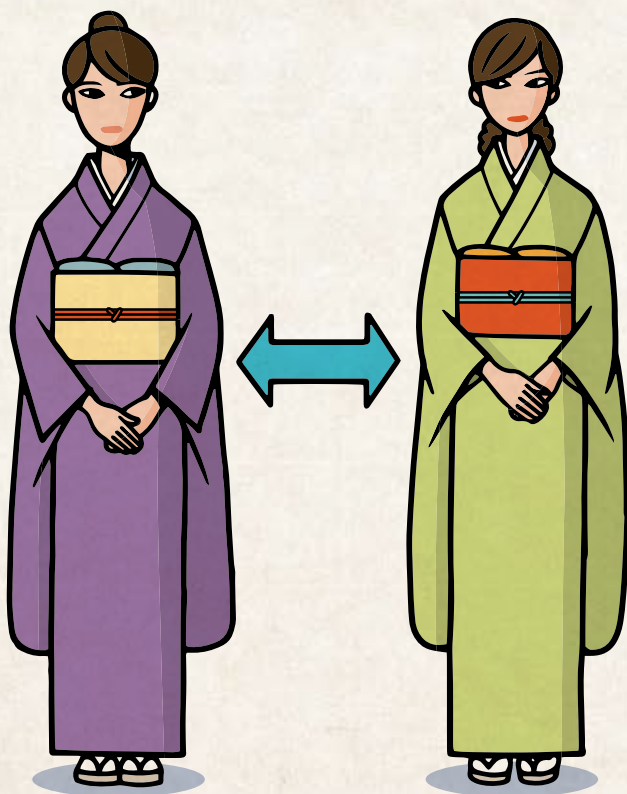
POINT

- 布マスクやウレタンマスクに比べ、不織布マスクの方が飛沫の飛散を抑える効果が高い傾向にある。
- フェイスシールドやマウスシールドについては、大きな飛沫(50マイクロメートル以上の水滴)であれば抑制する効果は見込めるが、より細かいエアロゾルは、ほぼ漏れてしまう。

(3) 距離の確保

人が密に集まって過ごすような空間において、不特定多数の人が接触することで、高い確率で感染が発生すると言われています。感染予防のため、大会を鑑賞する場合などは十分に演者および他の観客と距離をとり、吟詠教室等で練習する際も、先生や他の生徒と適切な距離を確保することが大切です。

「適切な距離」というのはどれくらいなのでしょう？ 新型コロナウイルスの感染経路の一つである飛沫感染は、くしゃみや咳によるしぶきによって他者へ感染させてしま



います。そのため厚生労働省では、日常生活で保つべき距離として、相手との距離を2m(最低でも1m)程度取ることを推奨しています。

しかし吟詠は大きな声を発するのが特徴であり、剣舞も気合を発します。その場合、通常の会話よりも飛沫が飛ぶ距離や量が大きくなることが予想されます。

果たしてどれくらい飛沫が飛ぶのか、今回、千葉大学と共同で、飛距離及び飛沫量の検証実験を行いました。剣舞の場合、独吟の場合、合吟の場合それぞれで、「マスクなし」、「マスクあり」、「フェイスシールド」と分けて計測した結果、次のようなことがわかりました(詳しくは16ページ以降を参照)。

剣舞

マスクの有無にかかわらず、飛沫は確認できなかった。

独吟

「マスクなし」、「マスクあり」、および「フェイスシールド」の比較。独吟の全8条件(男性/女性、初心者/上級者、和歌/強吟)において、「マスクあり」では飛沫は確認できず、飛沫の飛散防止効果が確認された。「マスクなし」で確認された飛沫の飛距離および個数は、それぞれ150~870mm、10~100個であり、条件により大きなばらつきがみられた。

和歌と強吟の比較

和歌と強吟(各4名)の比較において、飛距離および飛沫量ともに強吟が和歌を上回る傾向がみられ、強吟の平均値は和歌に対して飛距離で1.7倍、飛沫量で1.3倍であった。



高感度および超高速カメラでの撮影のためLEDの強い光を当てられるので、サングラスをして実演。剣舞、独吟、合吟ともマスクなし(左)、マスクあり(中)、フェイスシールド(右)と3回にわたり撮影

合吟

「マスクあり」では、飛沫は確認できなかった。「マスクなし」では、男性および女性ともに**370mm**ほど前方に設置されたマネキンの後頭部に多くの飛沫が到達する結果となった。「フェイスシールド」では、男性の飛距離および飛沫量に減少がみられたが、女性の場合ではみられていない。効果の違いの要因としては、フェイスシールドの付け具合(シールドの口からの距離や角度)などが挙げられる。

楽屋控室

楽屋控室の会話において、「マスクあり」では飛沫は確認できなかった。「マスクなし」では男性、女性ともに10個程度の飛沫が確認され、**飛距離は男性290mm、女性240mm**であった。

リハーサル声出し

リハーサル声出しでは、「マスクあり」では飛沫は確認できなかったが、「マスクなし」では会話時と比較して男性、女性ともに多数の飛沫が遠くまで到達することが確認された。**飛距離は、男性450mm、女性400mm**であった。

教室指導

『あ』のみの発声による教室指導では、男性、女性とも、マスクの有無、フェイスシールドによらず飛沫は確認できなかった。一方、『たちつてと』の発声では、男性、女性とも、「マスクなし」と「フェイスシールド」で多数の飛沫が確認され、**飛距離は290~310mm**であった。発声の音の違いにより、母音のみと子音が含まれる場合などで、飛沫の発生、飛散状況が大きく異なる傾向が確認された。



合吟では横方向への飛沫の分散具合をチェックするために、専用のメガネをかけてレーザー光線を当てての撮影も行った



教室指導を模して発声練習も行ったが、母音ではほとんど飛沫は飛ばず、タ行などの子音では飛沫が多いという結果になった

(4) 換気の励行

新型コロナウイルス感染対策では、「3密」を避けることが大切ですが、「密集」、「密接」と並ぶもうひとつが「密閉」です。換気の悪い密閉空間では、飛沫として放出されたウイルスが空気中に漂い、感染を引き起こすと言われています。そのため一定時間ごとに換気することが必要になります。

30分に1回以上、数分間換気する

それではいったいどのくらいの間隔で、どのようにして換気すれば良いでしょうか？ 吟詠教室を開催する場合などで悩まれている方も多いことと思います。

厚生労働省は令和2年11月27日付で「冬場における『換気の悪い密閉空間』を改善するための換気について」という資料を発表しています。

この中で「換気の悪い密閉空間」を改善するための必要換気量として、一人あたり毎時30m³が推奨されており、その根拠としては、これ以下の頻度では結核や麻疹の感染リスクが高くなることが挙げられています。

一人あたり毎時30m³、と言われても全くイメージが湧かないと思いますが、一人あたり毎時30m³の換気量というと、

- 標準的な商店売り場(一人あたり占有面積3.3m²で天井高さ2.8m)において、毎時3.2回の換気回数に相当する。

- 標準的なオフィス(一人あたり占有面積5m²で天井高さ2.8m)において毎時2.1回の換気回数に相当する。

とのことです。

これでもまだわかりづらいと思いますが、もう少し単純

化した目安として、

●換気回数を毎時2回以上(30分に1回以上、数分間程度、窓を全開する)

が厚生労働省から示されています。

窓や入口2方向を開けて風の流をつくる

換気はどのようにすればいいでしょう。まず風の流れができるよう、2方向の窓を全開にすることが効果的です。

窓がひとつしかない場合でも、入口のドアを開ければ、窓とドアの間に空気が流れます。扇風機や換気扇を併用するなど工夫をすれば、換気の効果はさらに上がります。

大会や教室の開催で、窓のないホールなどを借りる場合もあると思います。そうした窓のない施設でも、建物の施設管理者は感染を防止するため、法令により合理的な換気量を保つような維持管理に努めるよう定められています。

ビル管理法において、不特定多数の人が利用する施設では空気環境の調整により、一人当たり換気量を先ほど述べた30m³以上確保するよう努めなければならないとされています。

そのため窓のない施設でも必要以上に心配する必要はありませんが、会場内の二酸化炭素濃度が高くなりすぎないように、やはり**30分に1回程度の換気休憩**を入れたほうがいいでしょう。

室内の温度、湿度と換気方法

換気の問題点として、冬期には室温が下がりすぎることが挙げられます。前述の厚生労働省の換気に関する資料では、「冬期の外気温が低い環境下において、換気の悪い密閉空間の改善と適切な室温及び相対湿度の維持をどのように両立するか」について、有識者の意見を聴取しつつ、文献、国際機関の基準、国内法令基準等を考察して、その結果をまとめています。

それによりますと、まず世界保健機構(WHO)は、「室内温度が低いと冬場に死亡率や呼吸器系疾患に罹る頻度が高くなり、**室温を18度以上に保つ**ことが一般住民の健康を守るために、安全でバランスのとれたものである」と推奨しています。

また湿度については、新型コロナウイルスの感染と相対湿度との関係について十分に知見が蓄積されていないものの、「インフルエンザウイルスの不活性化率が最も高い相対湿度は約40%~60%」との報告があることから、**40%を相対湿度の下限值**とすることが妥当であるとしています。



換気と室温の維持を両立させる方法の例

(厚生労働省HPより)

これらのことを踏まえて、厚生労働省のHPでは「換気の悪い密閉空間を改善するための換気と、室温を適切に維持することを両立することは重要」として、次のように提唱しています。

●外気温が非常に低いときに窓の開放によって外気取り入れを行う場合は、一時的にでも室温が18°Cを下回ることを避けるため、また、室温が急激に変動することを避けるため、定期的に窓を全開する方法ではなく、常時、窓を少し開けて連続的に外気を取り入れつつ、暖房器具によって、常時、居室における温度及び相対湿度を18°C以上かつ40%以上に維持する方法が望ましい。また加湿器を併用することも有効である。

●人がいない部屋の窓を開け、廊下を經由して、少し暖まった状態の新鮮な空気を人のいる部屋に取り入れること(二段階換気)も、室温を保つために有効。

なお、2003年7月以降に着工された住宅には「常時換気設備(24時間換気システム)」が設置されています。

常時換気設備や台所、洗面所の換気扇を常時運転し最小限の換気量を確保するようにしましょう。

2

大会・コンクールでの対策事例



2020年11月、全国吟剣詩舞道大会に変わって開催された「吟と舞祭り」は、かつてない無観客で行われ、世界中にネットで配信された。出演者と大会関係者には厳格な感染防止対策が施され、成功のうちに幕を閉じた

吟剣詩舞で新型コロナウイルス感染予防対策が必要な状況としては、大会やコンクール、講習会や教室などがあります。まず2020年11月、全国吟剣詩舞道大会に変わって、日本武道館にて無観客で開催された「吟と舞祭り」の新型コロナウイルス対策マニュアルをもとにして、大会とコンクールの感染防止対策の例を挙げましょう。観客が入る場合には、同様に観客の対策も行います。

基本方針

(1) 以下の出演者及びスタッフは入場をお断り

- 風邪のような症状(発熱や咳)がある方。
- 体調がすぐれない方(倦怠感や息苦しさ、呼吸困難がある方)。
- 同居家族や職場、学校など身近に新型コロナウイルスに感染者もしくは感染の可能性のある方。

(2) ご高齢者、基礎疾患(高血圧、糖尿病、心血管疾患、呼吸器疾患および癌等)をお持ちの方、妊娠中の方、未就学児童をお連れの方は関係機構の情報を参考にしていただき、慎重なご判断をしていただきます。

(3) 感染症が疑われる者を発見した場合の対応

スタッフが体調不良者を発見、またはお客様、スタッフ自らの申告があった場合は、感染症の疑いが判明した段階でスタッフから運営本部に連絡。現場責任者及び会場責任者にて状況を協議し判断を行います。感染症の疑いがある旨をご説明し、帰宅を促し自宅待機を指示します。併せて会場側に対応した経緯を報告します。

- 感染症疑いのある者は一旦隔離し、他の関係者との接触を避ける。

※ 隔離場所と誰が対応に当たるのかを決めておかないと無闇に接触者を増やすこととなる。

運営

(1) 周知、広報

感染予防のため、以下について出演者及びスタッフへの周知、広報をお願いします。

- 咳エチケット、マスク着用、手洗いの徹底及び貼り紙等を用意。
- 掲示物、係員のアナウンスにて、手洗い及び咳エチケッ

トの励行を促す。

- 楽屋口付近に案内看板の設置及び係員が巡回。
- 場内各所にコロナ対策の案内文を掲示、係員がアナウンスでお願いします。

(2) 感染予防対策

- 関係各所の体調管理にご協力をお願いします。
- 全関係者の当日の検温、楽屋周りの接触。スタッフは1週間前から検温を実施。
- 出演者及びスタッフが直接接触する会場内施設、ドアノブ、トイレ等の清掃と消毒を会場側と協議しながら、こまめに行うようお願いします。
- 係員の配置等も、出演者及びスタッフとのソーシャルディスタンスを考慮しつつ、災害時の避難誘導はそれを考慮した配置と表記により補填する形で行う。
- 場内各所に消毒液を設置する。
- コロナ対策のマスク、フェイスシールドなどの備品は、スタッフ分用意する。
- 密になる場所では極力手で触れ合わず、必要最低限の会話に努めていただく。
- 咳エチケット、マスク着用、こまめな手洗いをお願いします。
- 会場内の扉を開ける等、館内の換気が常にできるように対応する。
- 作業別対策マニュアルの遂行に努めるよう、ご協力をお願いします。

事前に感染者及び疑いが出た場合の対応

(1) 出演者及びスタッフから、自ら感染の疑い(体調不良、発熱等)の申告があった場合は、必ず主催者にご報告を頂き、下記のような対応をします。

- 現場責任者、会場責任者にて状況を協議し判断を行う。
- 感染症の疑いがある旨をご説明し、自宅待機を指示しPCR検査を実施。併せて緊急連絡先各所に連絡する。
- 会場には対応した経緯を報告する。

(2) 主催者により開催の可否の判断をします。

(3) 主催および会場と連携を取りながら保健所他公的機関への参加者名簿の提出等指示内容を遵守し、感染拡大を防ぐよう努めます。また、保健所他公的機関から参加者名簿の提出等の要請があった場合は、主催者から情報提供する。

当日及び後日感染者が出た場合の対応

(1) 来場者から感染が確認された場合、必ず主催者に報告を行い、その際に入場時間、入場導線、当日移動経路

を確認、緊急連絡先各所への連絡が必要です。

(2) スタッフ、出演者の体調不良者を発見、または自らの申告があった場合は以下のように対応します。

- 感染症疑いのある者は一旦隔離し他の関係者との接触を避ける。

- 現場責任者、会場責任者にて状況を協議し判断を行う。

- 感染症の疑いがある旨をご説明し、自宅待機を指示し、PCR検査を実施。併せて会場には対応した経緯を報告する。

(3) 主催および会場と連携を取りながら保健所他公的機関への参加者名簿の提出等指示内容を遵守し、感染拡大を防ぐよう努めます。また、保健所他公的機関から参加者名簿の提出等の要請があった場合には、主催者から情報提供致します。会場には感染者が発生した旨と詳細を速やかに報告する。

感染対策について

(1) 公演関係者の感染症対策

① 公演関係者の感染防止策

- 発熱/咳/下痢/味覚障害/嗅覚障害等の症状がある者、新型コロナウイルス感染症の陽性と判明した者との濃厚接触がある者、同居家族や身近な知人の感染が疑われる者、過去14日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航及び当該国、地域の在住者との濃厚接触があった人は、自宅待機とする。

- 施設への入館者は原則として出演者とその付添人(上限1名)に限る。

- 主催者として公演関係者の緊急連絡先や勤務状況を



「吟と舞祭り」で合吟する東日本少壮吟士会のメンバー。撮影スタッフや舞台演出などの公演関係者と出演者は、1週間前から検温が義務づけられ、会場でも身体的距離の確保や手指の消毒などの対策を励行した



把握し、名簿を作成。こうした情報の場合によっては保健所等の公的機関へ提供する。個人情報保護の観点から、名簿等の個人情報の保管には十分な対策を講じる。

- 会場内では原則としてマスクの着用と、手指の消毒、手洗いの徹底をお願いします。
- 共用でタオル等の備品は使用せず、衛生管理の徹底をお願いします。

②身体的距離の確保等

- 公演関係者同士は**2メートル(最低1メートル)**の身体的距離が確保できるよう、人数は必要最小限にて願います。
- 仕込み、リハーサル撤去等において十分な時間を設定し、密な空間の発生を減らす。
- 仕込み、撤去作業時の大きな声での会話は飛沫による感染リスクが高まるため、フェイスシールド等の着用の対策を講じて行う。

③感染が疑われる者が発生した場合の対応策

- 感染が疑われる者が発生した場合、大会主催者までご連絡をお願いします、速やかに隔離して必要に応じて直ちに自宅待機とする。
- 対応するスタッフは、マスクや手袋の着用を徹底するようお願いします。
- 速やかに自治体の保健所へ連絡。
- 自宅療養となった者は、毎日健康状態を主催者へ報告し、必要に応じて新型コロナウイルス感染症の検査を受けるようお願いします。検査結果が陰性であっても、症状

が改善してから最低48時間が経過するまでは参加は認めない。(※)

④備品について

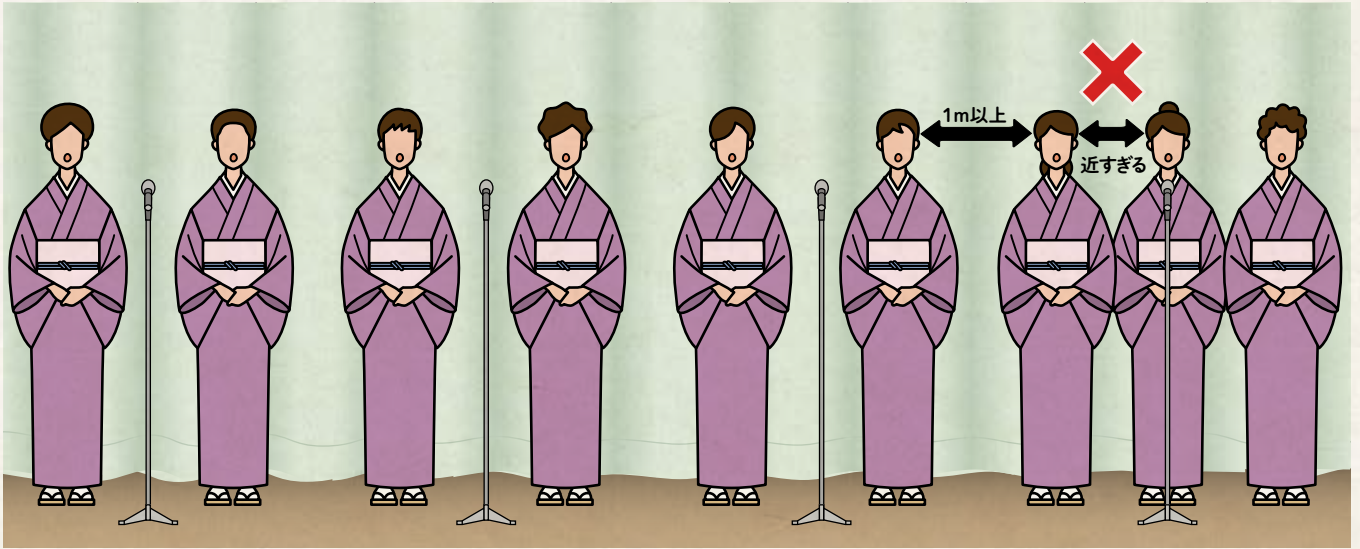
- スタッフが搬入出や仕込み時に使用した備品、手袋は使用後に必ずアルコールで消毒を行う。
- マイクは出演者ごとに使い回しはしないようにする。マイク使用の前後には、手洗いや手指消毒を行うとともに、使用した機器の消毒を徹底して行う。
- ステージの周辺は飛沫感染のおそれがあるため、ステージ周辺で作業を行う公演関係者は作業の前後にこまめな手洗いや手指消毒の徹底をお願いします。
- 使用した備品は原状復帰の際に、アルコールを含んだ布等で消毒を行う。

⑤換気について

- 搬入出時は空気の循環を促すため、各扉は開けて換気を行う。
- リハーサルおよび本番中は各会場の方針に従い換気を行う。

⑥ケータリング類及び楽屋

- 楽屋内は密にならないような配置や、常時換気等の対応をお願いします。
- 出演者との距離が近いケータリングスタッフは手指消毒の徹底とマスクやフェイスシールドの着用をお願いします。
- 楽屋の施錠をお願いする個室に関しては、楽屋のセッティング終了後は出演者が退館するまで、入室をご遠慮いただく。



- 紙コップは不特定多数の人が触れるため、アルコール消毒や手洗い等をしてから触れるようお願いす。また、使用した紙コップは放置せずゴミ箱へ廃棄する。

- 複数人での共用を避ける点からクーラーボックス、ポット類の使用ができない施設についてはドリンク類は全てペットボトルでのご提供をお願いす（個々に使用可能な、500ml等のペットボトルでの提供をお願いす）。

- 食事は全てお弁当での提供をお願いす。お弁当は、必ず手洗いまたは手指消毒を行ってからお取り頂き、できる限り対面で食事をしないようお願いす。お弁当ゴミはフタを閉めた状態で所定の弁当用ゴミ箱に棄てるようお願いす。

- 楽屋エリアへの不用意な必要以外の人員の出入りはご遠慮いただく。

⑦清掃及びゴミの処理

- 会場内、複数人が触れる場所や物品を極力減らすようお願いす。また、こまめな清掃と消毒をお願いす。

- ケータリングスタッフは必ずマスクとゴム手袋の着用をお願いす。

- 清掃場所のチェックリストを作成。チェックリストを確認しながら、清掃するようお願いす。

- 使用済みマスク、手袋の処理はウイルス付着の可能性があるので表面や内側に触れないようにマスクを外し、大袋にまとめて廃棄をお願いす。また、ゴミ袋の処理時は身体から離して袋の封を閉めるようお願いす。

- 清掃が終わった後は必ず手洗い、手指の消毒の徹底をお願いす。

⑧保健所との関係

- 関係者に感染が疑われる場合には、保健所の聞き取りに協力し必要な情報を提供す。

(2) 出演者対策事項

①起床時と入館時の検温の実施

- 出演者やその出演者が関係するスタッフは、リハーサル、公演1週間前から検温を実施す。

- 起床時の検温で発熱がみられた場合は、直ちに主催者へ連絡し、発熱が認められた場合自宅待機とする。入館時の検温は楽屋口にてネームリストを作成し、体温の記録をお願いす。万が一こちらで発熱が認められた場合は出演を取りやめ、公的医療機関へ移動するよう誘導す。

- その他、体調が優れない等の症状がある方は、直ちに主催者まで報告す。

②手指の消毒

- 入館時にアルコールで手指の消毒を行っていただく。

- 館内各所にアルコールを設置し、頻繁に手洗いや消毒を行う。

③マスク

- 入館時から原則としてマスクの着用は必須で、極力外さないようにしていただく（接触スタッフも同様の対応をお願いす）。

④吟詠について

- 出演者（吟者）が複数人出演する楽曲では、吟者同士の間隔を1m以上空ける。

- 使用したマイクは必ずアルコール消毒を行う。

- 自身の出番が終わったら、見学などで滞留せずできるだけ速やかに退館す。

⑤剣詩舞について

- 群舞の場合、剣舞は3名、詩舞は5名程度を上限とする。またその際の振り付けもできるだけ「密」が続かない振り

であること。剣舞については発声の際、他の演舞者に向かないよう注意する（飛沫対策のため）。

(3) 合吟コンクールでの感染対策

毎年秋に日本武道館で開催される全国吟剣詩舞道大会では、1チーム35人を基準とした合吟コンクールが開催され、全国の吟詠愛好家の憧れの舞台となってきました。

35人という大人数が一斉に吟ずるという迫力あるコンクールですが、広い武道館の舞台で2列に並んで実施されてきました。

しかし「舞台演目別 飛沫実証実験」では、「マスクなし」で行った場合、前列の吟者を模した人形に、後列の吟者から発せられた飛沫が非常に多く到達するという結果になりました（16ページ以降参照）。

「マスクなし」での合吟において、**飛沫がかからない安全な距離は前後2m、横1m**ほど必要と思われ、現在の状況では2列での実施はむずかしいという結論に達しました。

令和3年度の合吟コンクールは、横1列並びで1mの距離をとり、15人で行うことを検討しています。決定しましたら財団ホームページで発表しますのでそちらを参照のうえ、練習に活かすようにしてください。

(4) 観客対策事項

観客を入れる場合には、以下のような対応が必要になります。

①客席数の制限

- 収容人数は、各自治体が定める入場基準を参考とする。
- 舞台と客席との距離は最低2m以上を基準とし、それ以内の客席は使用不可とする。

②入館時の対応

- マスクの着用を促す。持っていない方には無償、もしくは有料で配布する。
- 入口にアルコール手指消毒剤を設置し、検温を実施するとともに消毒をお願いする。
- 来場客同士が十分な距離（最低1m）を確保して整列できるように、できるだけ足元マークや目印となる掲示物等を設置する。
- チケットの受け渡し等で対面対応が必要な場合は、アクリル板や透明ビニールカーテン等を設置する。
- クラスターが発生した場合は、地元の保健所へ連絡す



赤外線サーモグラフィによる検温、自動で噴出する消毒液など、国立文楽劇場が徹底したコロナ対策を実施



2020年10月に大阪・国立文楽劇場で開催された「正義流 吟と舞」では、全席指定の座席数は従来の半分以下におさえられ、座席に布が張られてソーシャルディスタンスが保たれた

る必要があることから、入場者の氏名、緊急連絡先などの情報を必ず取得する。

- 発熱があり入場をお断りした場合は、原則的にチケット料金の払い戻しに応じる。
- 楽屋見舞は原則的に禁止し、差し入れ等は受付で預かるようにする。

③開演時の対応

- 公演中、休憩中を問わずマスクの着用をお願いする。
- 大声での声援はせず、拍手のみの応援をお願いする（コンクール等で拍手も禁止の場合はその旨伝える）。
- 感染予防に基づいた禁止行為について注意を行い、指示に従わない場合は退場いただく場合があることを伝える。
- 観客全員での合吟は、十分な距離がとれてマスクをしている場合に限り可能とする。

④開演中及び休憩時の対応

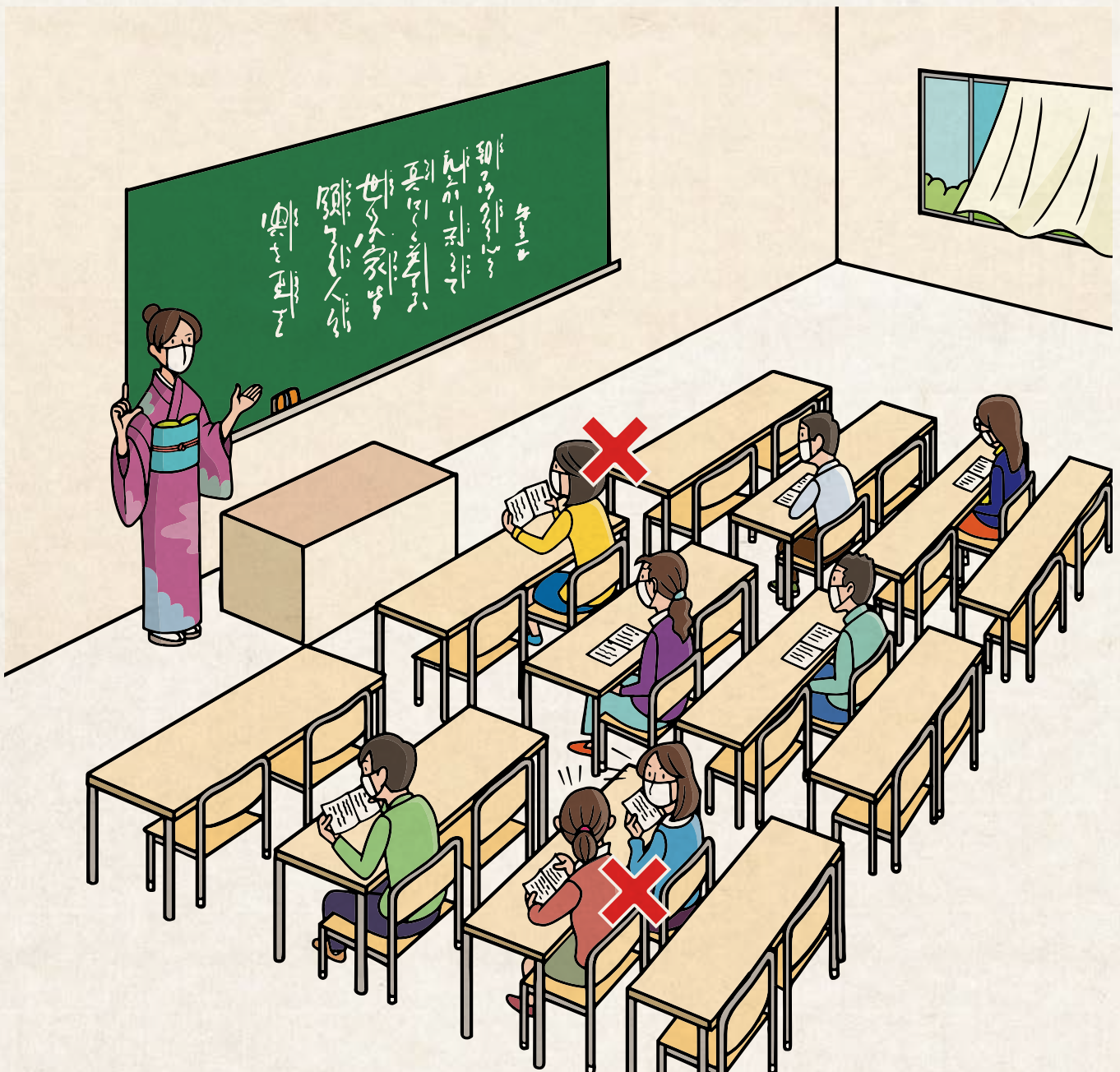
- 客席での飲食は原則的に禁止とする。
- 出演者と観客が接触するような演出は避ける。
- 30分に1回程度換気のための休憩を入れる。
- ホールの出入口にアルコール手指消毒剤を設置し、入退場時の使用をお願いする。

⑤終演時の対応

- 出入口が密にならないよう、順番に退場するように指示する。
- 出演者が観客を見送る場合は、出演者もマスク等をし、握手などの接触は避けるようにする。

3

講習会・教室での対策事例



吟剣詩舞での講習会や教室においても、手洗い・マスク・距離・換気の4つの基本行動が大切なことはもちろんです。それを前提にして、飛沫実証実験の結果も

考慮して、講習会・教室での望ましい感染防止対策を考えていきましょう。基本的に吟詠の講習会・教室を前提にし、剣詩舞については最後に補足します。

(1) 事前の準備

講習会・教室の主催者は、会場の大きさにあわせて十分な対人距離が確保できるような人数にしばって、開催することが必要です。もし密になるような状況であれば、回数を増やすなど適正な人数で実施できるようにしましょう。主催者は検温の器具とアルコール等の消毒剤を用意し、開始前に部屋内部の消毒と換気も実施しておきましょう。

参加者は自宅で検温し、熱がある場合や体が不調ならば参加をとりやめるようにします。マスクを複数用意することが望ましいですが、主催者も参加者が忘れた時のために予備を用意しておくといでしょう。

マスクの種類はさまざまな検証結果から、**不織布マスクが望ましい**です。もしフェイスシールドを使用する場合で主催者側が用意する時は、十分に消毒しておきましょう。また主催者、参加者ともにアルコールタイプの除菌ウェットシートも用意しておくといでしょう。

(2) 入室時

主催者は参加者が来たら検温(非接触型の体温計が望ましい)し、手指の消毒を促します。参加者は入室前からマスクをしておき、入室時に密集しないよう十分な距離をとって、会話もできるだけ控えるようにしましょう。

机や椅子を参加者が設営する場合は、あらかじめ時間と人員を設定し、手袋を着用するなど、多人数が触れないようにして行います。

席は指導者と生徒の距離を十分に保ち、生徒が数列にわたって座る場合には、まっすぐ後ろに座らず、交互になるようにします。また横方向も1m以上の間隔を開けるようにしましょう(前ページのイラスト参照)。

(3) 講習・教室開催時

開始前にウォーミングアップとして体操やストレッチを行う場合は、隣や前後の人と適切な距離を保ち密にならないようにしましょう。

開始時には全員で財団会詩や流派会詩を合吟するところも多いですが、前の人の真後ろではなく互い違いになるようにし、できるだけマスクをして合吟するようにしましょう。

一人ずつ詠う場合もマスクをしていることが望ましいですが、マスクをして詠うと声がこもる、口の動きがわ

からないなどのデメリットがあり、コンクールが近いというような場合にはできればマスクなしで詠いたいことでしょう。その場合でもまったく防護具なしではなく、フェイスシールドをして、前に人がいないような位置で詠うようにしましょう。

フェイスシールドをして詠う場合、シールドが上向き加減だと飛沫が前に飛びがちになるので、しっかりシールドを口元まで倒すことが大切です。また他の人が詠うのを聞く場合には、フェイスシールドをしていてもマスクも着用するようにしましょう。

主催者は約30分に一度は数分間換気するようにします。休憩中に水分等を摂るためにマスクを外す時には、他の人と会話はしないようにしましょう。

吟譜やプリントなどを配る場合は、一人ずつ用意して共有は避けるようにしましょう。

(4) 講習・教室終了時

机や使用したフェイスシールドなどは、除菌ウェットシートなどでよく拭いて消毒します。マスクは廃棄して新しいマスクに替えることが望ましいでしょう。

退室時には出口に密集しないよう、分散して退場するようにし、ふたたびアルコール消毒をして退室します。終了後に仲間と会食をするのを楽しみにしている人もいるでしょうが、できるだけ控えるようにし、とくに大人数になるような会食は慎みましょう。

連絡やミーティングはできる限りオンラインなど対面によらない方法で行うようにします。オンラインでの実施がむずかしい場合は、十分な距離がとれる状況で、少人数により短時間で済むように行いましょう。

(5) 剣詩舞での講習・教室

剣詩舞の場合、吟詠のように飛沫が飛ぶことが少ないので感染のリスクも低くなりますが、手洗いの徹底や距離の確保が必要なことは言うまでもありません。

剣詩舞の稽古では稽古着に着替えることが必要になりますが、マスクを着用のうえ、十分な距離をとって着替えるようにします。他の人との会話もできるだけ控えて、速やかに着替えをすますようにしましょう。

稽古時も吟詠同様に不織布マスク着用が望ましいですが、実験では気合を発してもあまり飛沫は飛ばないという結果でした。ただし他の参加者と近い位置で気合を発することのないよう、注意してください。



日本伝統芸能 吟剣詩舞
舞台演目別 飛沫実証実験
報告書

2021年1月29日（金）

公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会

新型コロナウイルス感染症ガイドライン「飛沫検証実験」

日時：2021年1月29日（金） 9：00～16：00

場所：ニッショーホール（旧ヤクルトホール）（東京都港区東新橋 1-1-19 ヤクルト本社ビル）

内容：新型コロナウイルス感染症予防ガイドライン作成のための飛沫実験

協力：千葉大学田中・太田研究室、カトウ光研、東京都吟剣詩舞道総連盟、舵社（月刊「吟と舞」）

担当：会館管理室 照井弘子、佐藤正広(技術) TEL：03-6263-9957

スケジュール ※次頁「飛沫検証実験進行表」参考

9:00 関係者集合 ※8：50 正面ドア開錠

9:10～10:30 機材設営&場当たり

10:30～

- ・「剣舞」飛沫実験（モデル：石井誠紀先生）
- ・「独吟初心者男性」(モデル：丹治独風先生、熊木雪洲先生)
- ・「独吟上級者男性」(モデル：清水錦洲先生)
- ・「独吟初心者女性」(モデル：中野吟紫先生、奥村精暉先生)
- ・「独吟上級者女性」(モデル：中野吟紫先生、奥村精暉先生)
- ・「合吟男性」（男性5名）
- ・「合吟女性」（女性5名）
- ・「楽屋控室」（男性2名/女性2名）
- ・「声出し」（男性1名/女性1名）
- ・「司会」（モデル：丹治独風先生）
- ・「教室指導」（モデル：八文字剛洲先生、毛塚静精先生）

15:40 終了

16:00 撤収

ポイント：

- ◎調査パターンは4種類
- ◎調査協力者10名（都総連協力）
- ◎本番を想定した衣装をそれぞれ準備（和装もしくは財団指定の略礼服）

注意点：

- ・カトウ光研微粒子可視化システム PV2-L を使用。撮影動画より飛沫が確認された時間（6秒）を抽出して積算画像を作成し、飛沫の最大飛距離と個数を計測
- ・国産不織布マスクを使用。ハイパーブロックマスク（普通サイズ）、大王製紙株式会社
- ・ホール内温度 16℃、湿度 28%

検証の様子



1. 剣舞 石井誠紀 八幡公



2. 独吟 初心者男性 和歌



3. 独吟 初心者男性 強吟



4. 独吟 上級者男性 和歌



5. 独吟 上級者男性 強吟



6. 独吟 初心者女性 和歌



7. 独吟 初心者女性 強吟



8. 独吟 上級者女性 和歌



9. 独吟 上級者女性 強吟



10. 合吟 男性



11. 合吟 女性



12. 楽屋控室 男性 控室「密」パターン



13. 楽屋控室 女性 控室「密」パターン



14. リハーサル声出し 男性



15. リハーサル声出し 女性



16. 司会 男性 コンクール形式

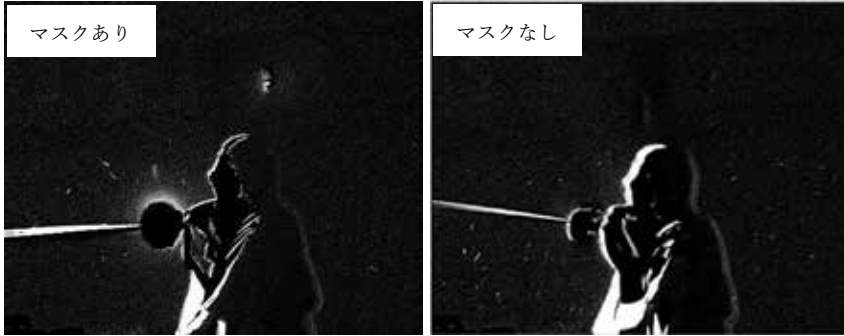


17. 教室指導 男性 指導者と生徒



18. 教室指導 女性 指導者と生徒

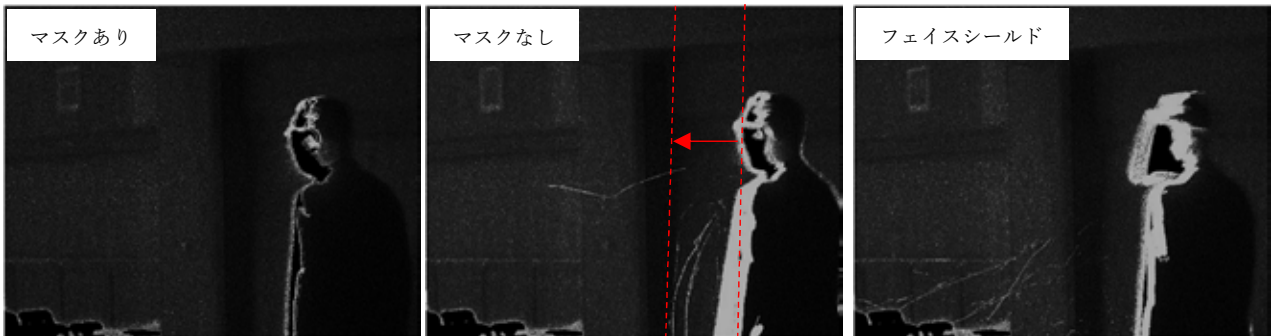
検証結果



飛沫は確認できず

飛沫は確認できず

1. 剣舞 石井誠紀 八幡公

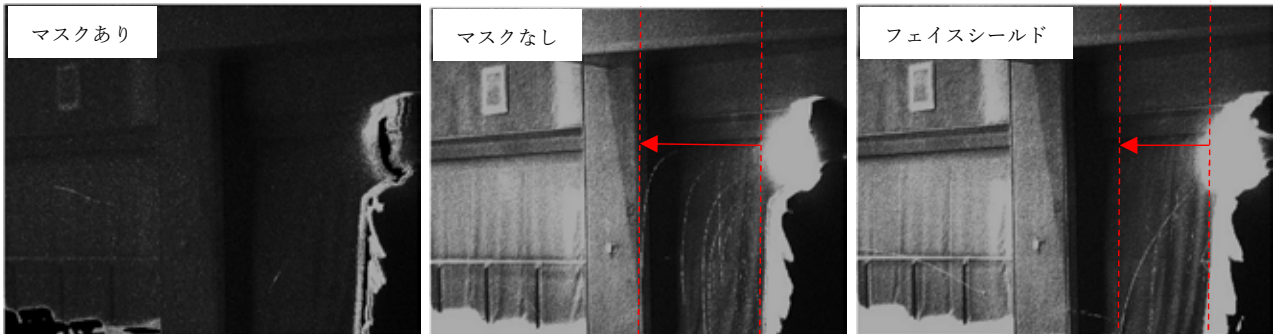


飛沫は確認できず

260 mm, 10 個

飛沫は確認できず

2. 独吟 初心者男性 和歌 丹治独風 和歌ふるさとの



飛沫は確認できず

490 mm, 20 個

330 mm, 10 個

3. 独吟 初心者男性 強吟 熊木雪洲 涼州詞

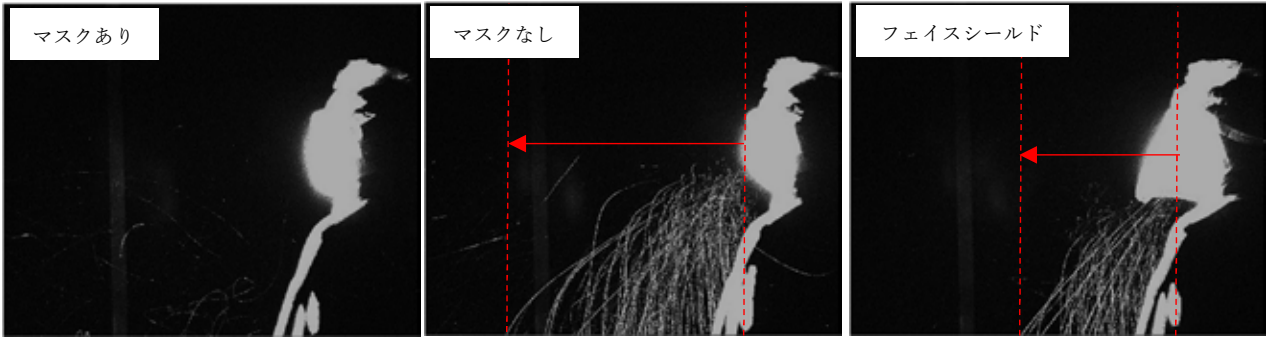


飛沫は確認できず

230mm, 10 個

210 mm, 5 個

4. 独吟 上級者男性 和歌 清水錦洲 和歌我が胸の

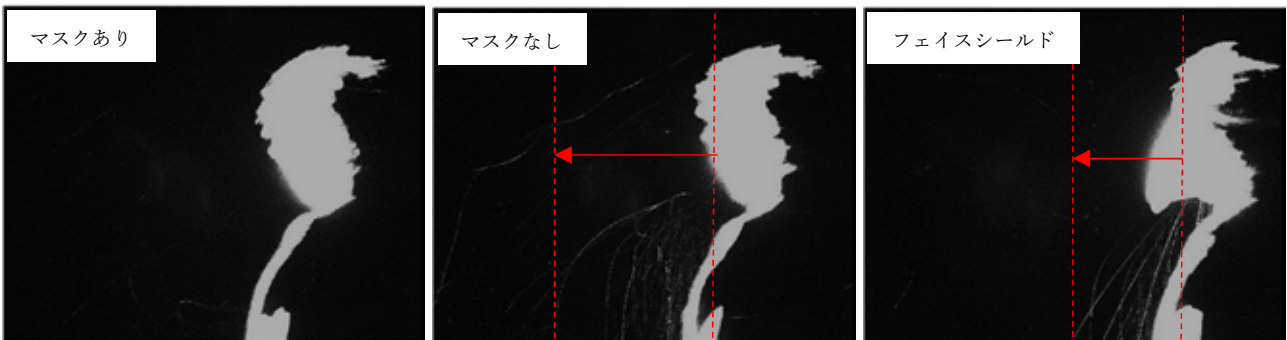


飛沫は確認できず

870 mm, 100 個

550 mm, 70 個

5. 独吟 上級者男性 強吟 清水錦洲 坂本龍馬を思う

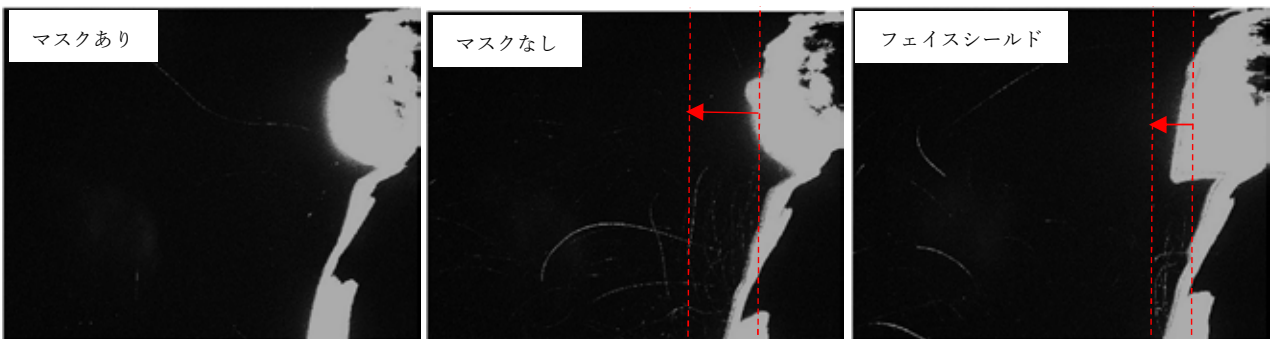


飛沫は確認できず

530 mm, 70 個

290 mm, 30 個

6. 独吟 初心者女性 和歌 中野吟紫 和歌晴れてよし

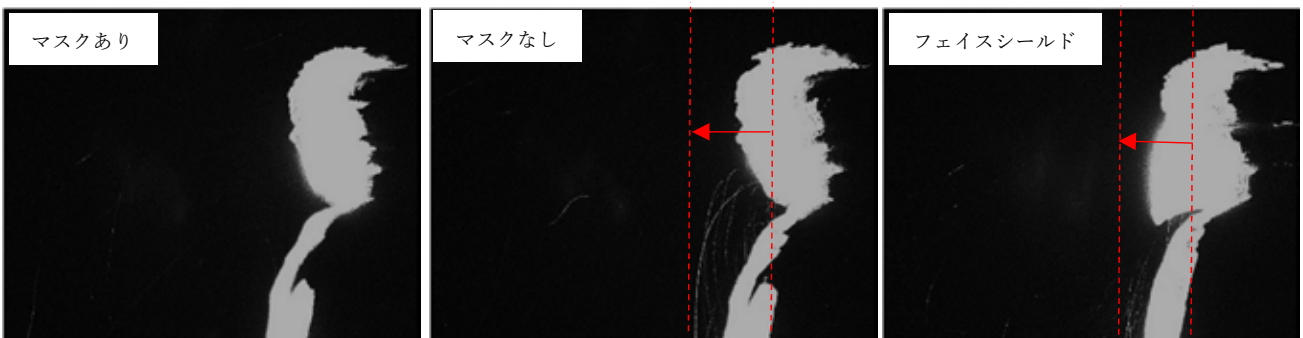


飛沫は確認できず

200 mm, 10 個

100 mm, 3 個

7. 独吟 初心者女性 強吟 奥村精曄 不識庵機山を撃つのに題す



飛沫は確認できず

150 mm, 20 個

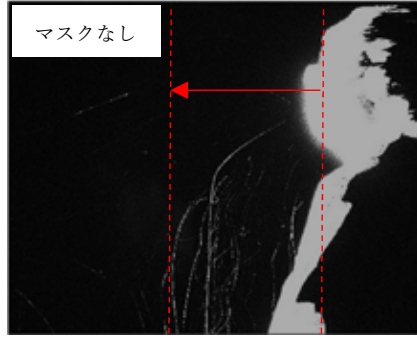
150 mm, 10 個

8. 独吟 上級者女性 和歌 中野吟紫 和歌晴れてよし



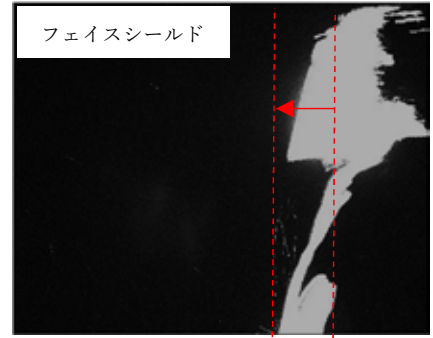
マスクあり

飛沫は確認できず



マスクなし

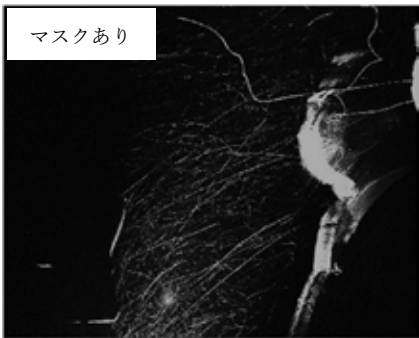
350mm, 40 個



フェイスシールド

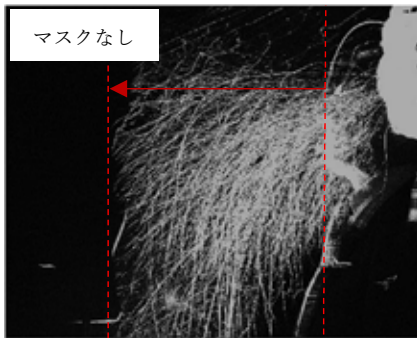
160 mm, 6 個

9. 独吟 上級者女性 強吟 奥村精曄 不識庵機山を撃つのに題す



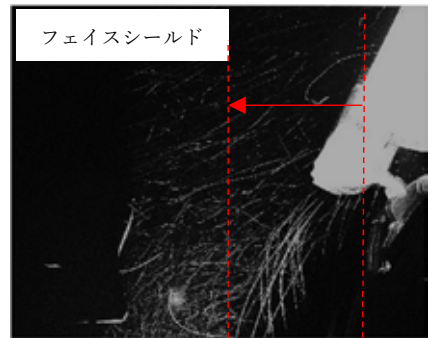
マスクあり

飛沫は確認できず



マスクなし

370 mm, 多数



フェイスシールド

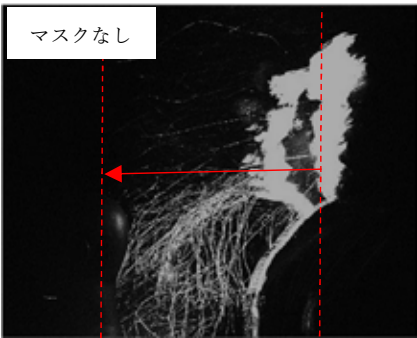
250 mm, 20 個

10. 合吟 男性 八文字剛洲, 清水錦洲, 熊木雪洲, 丹治独風, 石井誠紀 富士山



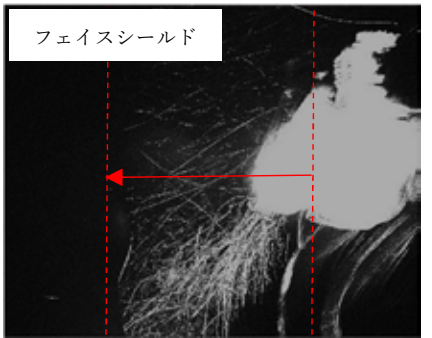
マスクあり

飛沫は確認できず



マスクなし

370 mm, 多数



フェイスシールド

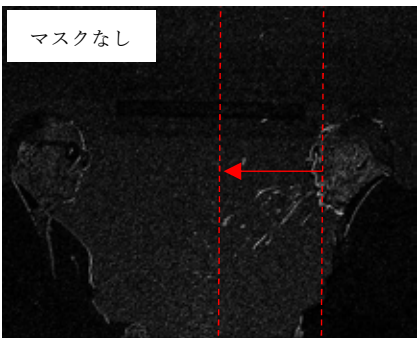
370 mm, 多数

11. 合吟 女性 毛塚静精, 奥村精曄, 中野吟紫, 榊裳風, 鈴木洲玉 立山を望む



マスクあり

飛沫は確認できず



マスクなし

290mm, 10 個

12. 楽屋控室 男性 丹治独風, 石井誠紀 控室「密」パターン



マスクあり

飛沫は確認できず



マスクなし

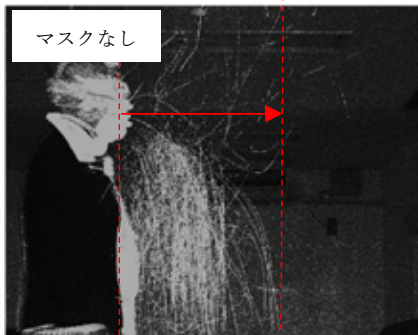
240mm, 10個

13. 楽屋控室 女性 榊裳風, 鈴木洲玉 控室「密」パターン



マスクあり

飛沫は確認できず



マスクなし

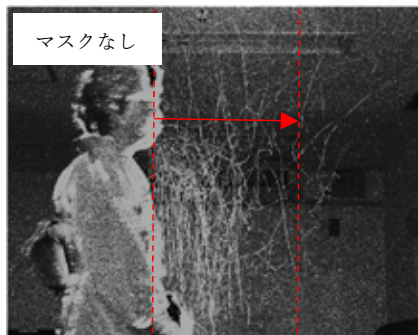
450 mm, 多数

14. リハーサル声出し 男性 熊木雪洲 密の状況での発声した場合



マスクあり

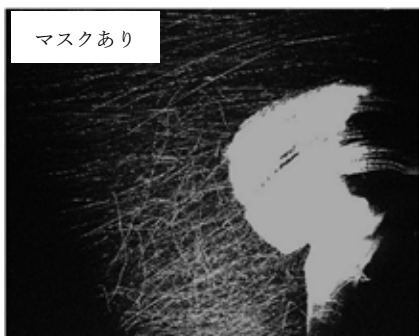
飛沫は確認できず



マスクなし

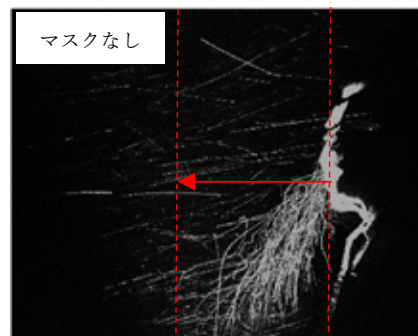
410 mm, 50個

15. リハーサル声出し 女性 榊裳風 密の状況での発声した場合



マスクあり

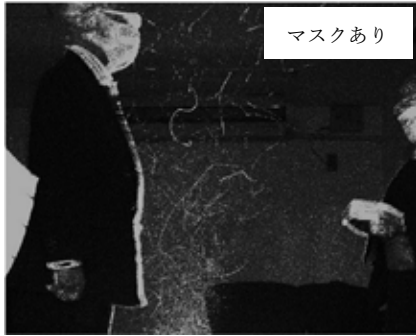
飛沫は確認できず



マスクなし

300 mm, 60個

16. 司会 男性 丹治独風 コンクール形式



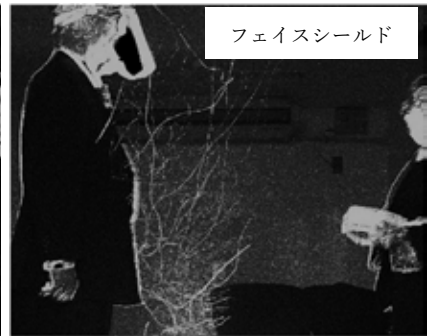
飛沫は確認できず

17. 教室指導 (あ)

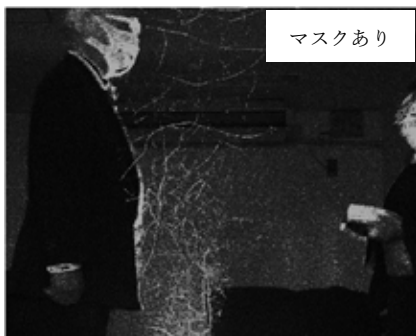


飛沫は確認できず

男性 八文字剛洲 指導者と生徒 (距離と顔の向き)

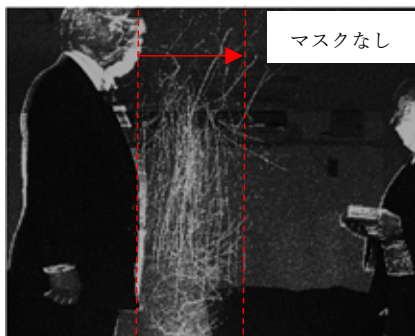


飛沫は確認できず



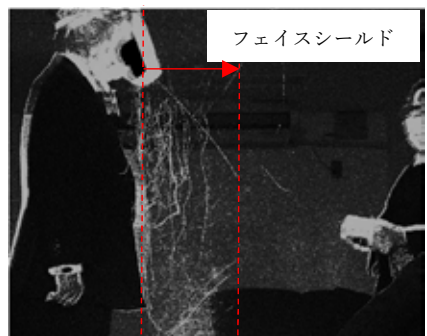
飛沫は確認できず

17. 教室指導 (たちつと)



310 mm, 50 個

男性 八文字剛洲 指導者と生徒 (距離と顔の向き)



310 mm, 25 個



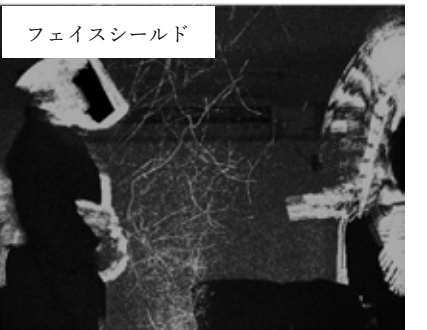
飛沫は確認できず

17. 教室指導 (あ)



飛沫は確認できず

女性 毛塚静精 指導者と生徒 (距離と顔の向き)

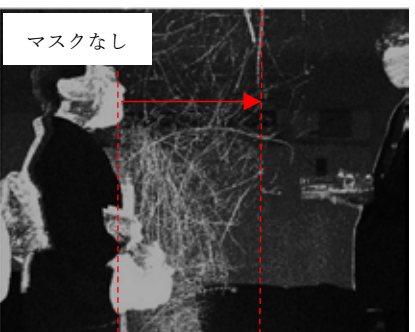


飛沫は確認できず



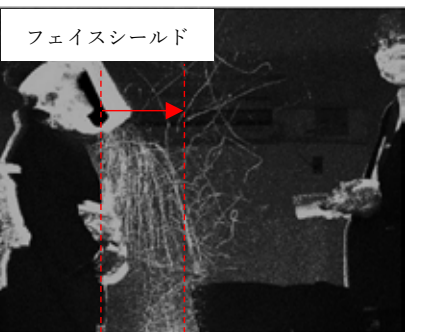
飛沫は確認できず

17. 教室指導 (たちつと)



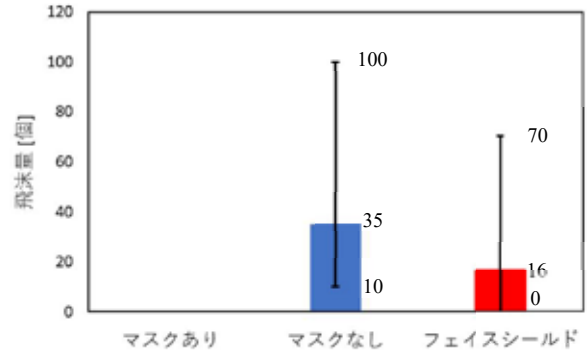
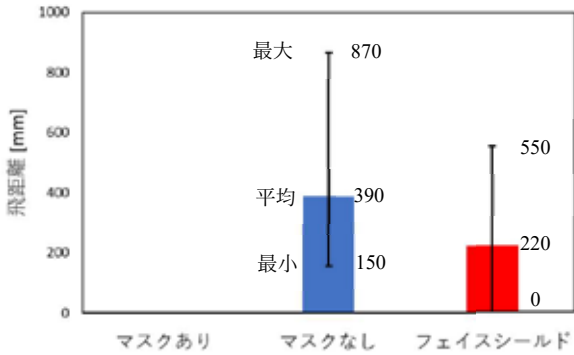
380 mm, 多数

女性 毛塚静精 指導者と生徒 (距離と顔の向き)

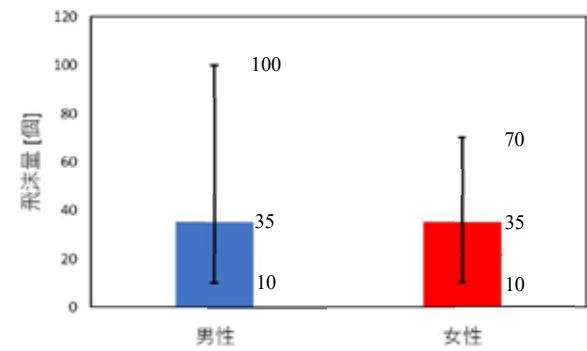
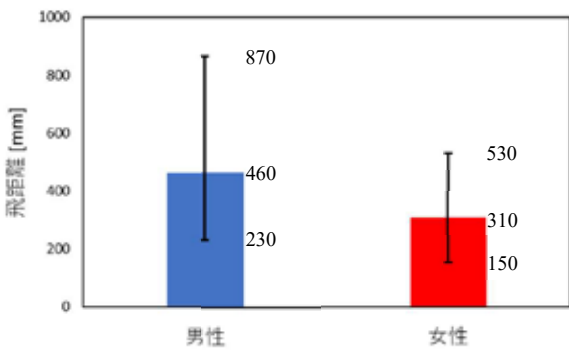


290 mm, 多数

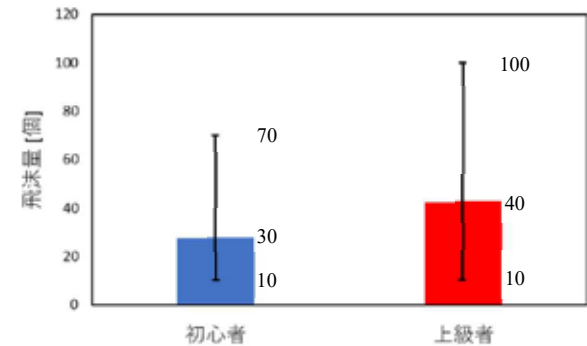
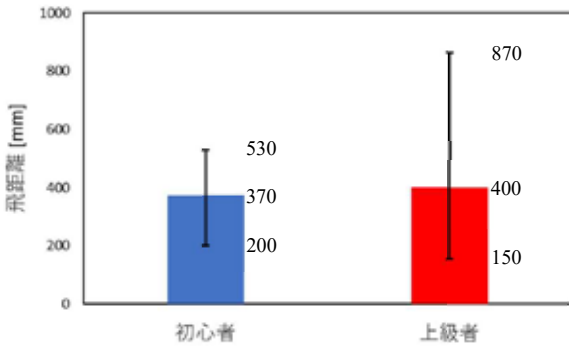
独吟（2-9.）における飛距離と飛沫量の分析



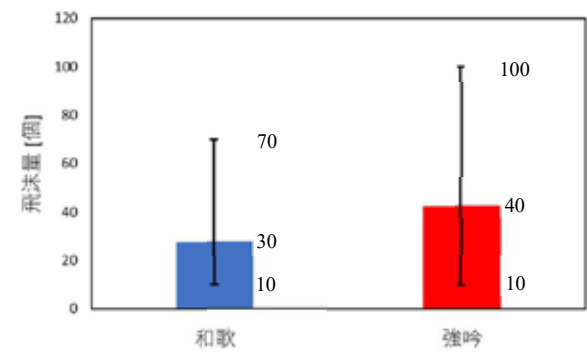
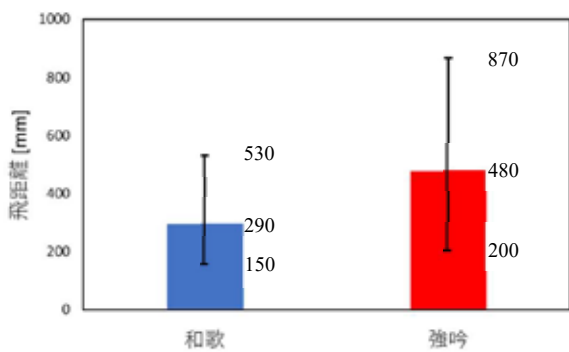
1. マスクあり，マスクなし，フェイスシールドの比較（独吟）



2. 男性と女性の比較（独吟，マスクなし）



3. 初心者と上級者の比較（独吟，マスクなし）



4. 和歌と強吟の比較（独吟，マスクなし）

まとめ

1. 剣舞

マスクの有無にかかわらず、飛沫は確認できなかった。発声が「えい」など短く、また主に母音であったことなどが要因として挙げられる。

2-9. 独吟

・マスクあり、マスクなし、およびフェイスシールドの比較

独吟の全8条件（男性／女性，初心者／上級者，和歌／強吟）において、マスクありでは飛沫は確認できず、飛沫の飛散防止効果が確認された。マスクなしで確認された飛沫の飛距離および個数は、それぞれ150～870 mm，10～100個であり、条件により大きなばらつきがみられた。また、全条件における飛距離および飛沫量の平均値はそれぞれ390 mm，35個であった。フェイスシールドでは、飛距離および飛沫量はいずれもマスクなしより減少したが、フェイスシールド下端の隙間から飛沫が飛散するため、飛散防止効果は限定的であった。

・男性と女性の比較

男性と女性（各4名）の比較において、飛距離については男性が女性を上回る傾向がみられ、男性の平均値は女性の場合の1.5倍であった。一方、飛沫量については男女間で違いはみられず平均値は同じであった。

・初心者と上級者の比較

初心者と上級者（各4名）の比較において、飛距離については大きな違いはみられなかった。飛沫量については上級者が初心者を上回る傾向がみられ、上級者の平均値は初心者の場合の1.3倍であった。

・和歌と強吟の比較

和歌と強吟（各4名）の比較において、飛距離および飛沫量ともに強吟が和歌を上回る傾向がみられ、強吟の平均値は和歌に対して飛距離で1.7倍、飛沫量で1.3倍であった。

10-11. 合吟

マスクありでは、飛沫は確認できなかった。マスクなしでは、男性および女性ともに370 mmほど前方に設置されたマネキンの後頭部に多くの飛沫が到達する結果となった。フェイスシールドでは、男性の飛距離および飛沫量に減少がみられたが、女性の場合ではみられていない。効果の違いの要因としては、フェイスシールドの付け具合（シールドの口からの距離や角度）などが挙げられる。

12-13. 楽屋控室

楽屋控室の会話において、マスクありでは飛沫は確認できなかった。マスクなしでは男性・女性ともに10個程度の飛沫が確認され、飛距離は男性290 mm, 女性240 mmであった。また、お互いに向き合って会話をしている2人の間でも飛沫の発生・飛散状況には違いがみられ、個人差も大きいことが示唆された。

14-15. リハーサル声出し

リハーサル声出しでは、マスクありでは飛沫は確認できなかったが、マスクなしでは会話時と比較して男性・女性ともに多数の飛沫が遠くまで到達することが確認された。飛距離は、男性450 mm, 女性400 mmであった。

16. 司会

マスクありでは飛沫は確認できなかったが、マスクなしでは60個ほどの飛沫が確認され、飛距離は300 mm程度であった。

17. 教室指導

「あ」のみの発声による教室指導では、男性・女性とも、マスクの有無、フェイスシールドによらず飛沫は確認できなかった。一方、「たちつてと」の発声では、男性・女性とも、マスクなしとフェイスシールドで多数の飛沫が確認され、飛距離は290～310 mmであった。発声の音の違いにより母音のみと子音が含まれる場合などで飛沫の発生・飛散状況が大きく異なる傾向が確認された。



公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-4-10 虎ノ門35森ビル TEL.03-6721-5950 FAX.03-6721-5960 www.ginken.or.jp